

# 技能実習生の交代によるコミュニティの再構築

—受け入れ側の日本語母語話者とのコミュニケーションに注目して—

飯田朋子（筑波大学大学院生）

## 要 旨

技能実習生には実習が可能な期間が定められていることから、受け入れ企業では、技能実習生の交代による人員の変化が常に起こっている。従って、技能実習生および受け入れ側の日本語母語話者は、人員の変化と共にコミュニティの再構築を繰り返している。技能実習生と受け入れ側の日本語母語話者とのコミュニケーションに関して、技能実習先でのコミュニティ構築についての研究は充分にはなされていない。本研究においては、技能実習生の交代に関して、特に技能実習生と受け入れ側の日本語母語話者の協働現場におけるコミュニケーションに着目し、技能実習生のコミュニティがどのように再構築されるかを明らかにする。

**キーワード：**技能実習生、外国人労働者、コミュニケーション、エスノグラフィー、コミュニティ

## 1. はじめに

現在、外国人技能実習制度のもとで多くの外国人技能実習生（以下、技能実習生）が来日し、受け入れ企業の日本語母語話者と協働している。技能実習制度に関しては未だに多くの問題が報告されており、それは技能実習生と日本語母語話者とのコミュニケーションや、日本語教育においても同様である。現在、技能実習生に認められている在留期間は最長5年であるため、受け入れ企業では技能実習生の交代による人員の変化が常に起こっている。現状の問題を解決し、今後の技能実習生や受け入れ企業への支援を行うためには、技能実習生の実習開始、終了など、技能実習生の交代という節目に着目して技能実習生のコミュニティ構築を研究することの意義は大きい。従って、本研究においては、技能実習生の交代に関して、特に技能実習生と受け入れ側の日本語母語話者の協働現場におけるコミュニケーションに着目し、技能実習生のコミュニティがどのように再構築されるかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究では、技能実習生を受け入れている企業に対し、エスノグラフィー調査を研究の枠組みとして用い、技能実習生と日本語母語話者の協働現場での継続的な調査を行う。加えて、会話を分析する方法として、会話分析（Conversation Analysis）およびマイクロエスノグラフィー（Microethnography）の手法を援用する。これにより、技能実習生と日本語母語話者の協働現場でのやりとりを、より詳細に明らかにすることが可能になる。

エスノグラフィー調査として、主に以下の3つの方法を取る。1つ目は参与観察である。技能実習生と日本語母語話者の協働現場で参与観察を行い、協働現場のデータを可能な限

り記録したフィールドノートを作成する。馮（2013）は、研修生・技能実習生の日本語習得の実態と日本社会・日本人との関わり方やそこでの諸問題の研究について、継続的な調査の重要性を述べている。このことから、本研究では、調査対象について1ヶ月に1度以上の調査を年単位で継続して行う。2つ目はインタビューである。本研究では、中川・神谷（2017, 2018）の技能実習生への聞き取りを参考に、日本語学習状況や日本語使用、地域住民との関わりなどに関して半構造化インタビューを実施した。本研究ではインタビューの結果をデータとして扱うと共に、インタビュー時の音声および映像データそのものも分析の対象としている。3つ目は、協働現場の録音および録画である。本研究では、参与観察およびインタビューの際、調査対象者に許可を取って可能な限りの録音・録画を行う。これにより、協働現場におけるコミュニケーションを音声・映像データとして残し、より詳細な分析を行うことができる。なお、調査対象者全員の母語で同意書を作成し、署名をもらうことで、研究への同意を取った。

### 3. 研究対象

研究対象は、千葉県の特産農家、アルファ社（仮称）である。技能実習制度においては、職種は耕種農業であり、作業は施設園芸である。アルファ社の社長によれば2019年から遡って、15年ほど前から中国人技能実習生の受け入れを行っている。常に3~4人の技能実習生を受け入れており、本研究において調査を行った技能実習生は5人である。各技能実習生に関しては、個人情報保護の観点から便宜的に $\alpha A$ ・ $\alpha B$ ・ $\alpha C$ ・ $\alpha D$ ・ $\alpha E$ と呼称する。

これまでの調査日および、それぞれの調査日における調査対象の技能実習生を、以下表1に示す。本論文では2019年11月までの調査を対象とする。

表1 アルファ社での調査日および調査対象

調査回	調査日	フィールドノート	録音	録画
(技能実習生： $\alpha A$ ・ $\alpha B$ ・ $\alpha C$ ・ $\alpha D$ )				
第1回	2019年1月10日	○	○	○
第2回	2019年1月19日	○		
(2019年1月25日に $\alpha A$ と $\alpha B$ が帰国 技能実習生： $\alpha C$ ・ $\alpha D$ )				
第3回	2019年2月23日	○		○
(2019年2月27日に $\alpha E$ がアルファ社に到着 技能実習生： $\alpha C$ ・ $\alpha D$ ・ $\alpha E$ )				
第4回	2019年2月28日	○	○	○
第5回	2019年3月28日	○	○	○
第6回	2019年4月29日	○		
第7回	2019年5月29日	○	○	○
第8回	2019年6月29日	○		
第9回	2019年7月31日	○	○	
第10回	2019年8月4日	○	○	○
第11回	2019年9月3日	○	○	○

第12回	2019年10月27日	○	○	○
第13回	2019年11月23日	○		

#### 4. 研究結果

研究結果について、インタビュー映像の分析による実習生の発言傾向、「電話番」システム、そしてコミュニケーションにおける問題の3つに分けて順に述べる。

##### 4.1. インタビュー映像の分析による実習生の発言傾向

表1で示した第1回調査において、技能実習生  $\alpha A \cdot \alpha B \cdot \alpha C \cdot \alpha D$  の4名にインタビューを行った。これには、上記の技能実習生4名に加え、アルファ社の日本人スタッフ  $\alpha S$ 、そして筆者Tが参加した。

以下 [インタビュー $\alpha$ ] はインタビューを一部抜粋したトランスクリプトである。

[インタビュー $\alpha$ \_14:03]

((インタビューの中で、技能実習生の年齢についてTが尋ねている。個人情報の保護のため、年齢は実際のものから変更を加えている。))

- 01 T : み, みなさんは, いくつ, ですか? とし.  
02 (0.3)  
03  $\alpha B$  : とし?  
04 T : とし, 年齢.  
05 (0.5)  
06 T : え::[: ]  
07  $\alpha S$  : [なん]さ[い? ]  
08 T : [° そ]うですね°, なんさい?  
09  $\alpha D$  : <なんさい?>=  
10  $\alpha A$  : =いま, (0.3) hh  
11  $\alpha S$  : つ h[h ]  
12  $\alpha B$  : [¥いま], わたし, かえる中国, すぐしんねん (.)  
13  $\alpha B$  : しんねんおわりわたし, 23 さい. ¥  
14 T : [23 歳, <うんうん> ]  
15  $\alpha S$  : [23 歳, 中国で 23 歳]っていうことは, (.)  
16  $\alpha S$  : う:んと? な, 何年生まれって聞いた方が早いかな=  
17  $\alpha S$  : =中国の場合たぶんあの:: 1 歳としを多く, 言うんで:.  
18 T : あ:::.  
19  $\alpha S$  : うん, うんもう年が明けたらもう, もう年齢おお, 多く言っちゃうんで.  
20  $\alpha S$  : で日本:で言ったらたとえば俺が満 40 歳んところを:,  
21  $\alpha S$  : 41 とか 42 とか言うんだよねえ=  
22  $\alpha S$  : =[中国語は.]

- 23 T : [うんうん]  
 24 αS : ねえ, だからちょっと違うんだよね, 中国はね.  
 25 αS : [だから ]=  
 26 T : [° そっか° ]  
 27 αS : =西暦何年, 千九百あつ, あつとお, =  
 28 αS : =あ[<千九百なんねん?>]  
 29 αA : [あい, ]い:, いま:, にじゅう: に.  
 30 αS : うん, あ, ああ, 22ね.  
 31 αA : あ, あ: りやねん: =  
 32 αS : =おん, 23. =  
 33 αA : =ん, は, はい, [す, すすぐしんねん.]  
 34 αS : [せ, せん, うん. ]千九百なんねん生まれ?  
 35 (. )  
 36 αA : 千九百なな.  
 37 (. )  
 38 αS : う, ん, んん? 千九百?  
 39 αA : 千九百きゅ[うなな. ]  
 40 αS : [きゅうじゅう, ] きゅうじゅうなな. =  
 41 αA : =きゅうじゅうなな.

インタビューは個別ではなく、技能実習生全体に向けて行った。01行目でTは「み、みなさんは、いくつ、ですか? とし。」と、「いくつ」と「とし」という2種類の言葉を用いて技能実習生の年齢を尋ねている。しかし、02行目で0.3秒の沈黙が産出され、技能実習生からの答えはない。その後、03行目でαBが「とし?」と繰り返し、言葉の意味の不理解を示す。これに対して04行目でTは「とし、年齢。」と、「年齢」という言葉に変えて再び質問の理解を促すが、05行目でも0.5秒の沈黙が起こり、技能実習生に質問の意味は理解されていない。06行目でTが「え::[: ]」と言葉に詰まっているところへ、07行目で日本人スタッフαSが「[なん]さ[い? ]」(何歳)と言葉を変えることで助け船を出す。しかし、これに対しても09行目でαDは「<なんさい?>=」と聞き返しの発話を行っている。この09行目でαDは08行目のTの発話である「なんさい?」を繰り返していることから、09行目のαDは、言葉の意味が理解できていないが故に繰り返しを行っていると見ることができる。その後、10行目でαAが「=いま,」とαDの発話をすぐに継いで発話を行い、12・13行目でαBが「[¥いま], わたし, かえる中国, すぐしんねん (. ) しんねんおわりわたし, 23さい. ¥」と、Tの01行目からの質問に回答している。この場面では、αAとαBが協同的に返答を行ったと見ることができる。

トランスクリプト [インタビューα] では、質問に対する回答を行っているのは主にαAであり、αAの発言量が多いことが分かる。次点で発言が多いのはαBである。これはインタビュー全体の傾向であり、日本人スタッフも他の技能実習生も、返答や発言に困った際にはαAに発話を求める傾向にあった。

## 4.2. 「電話番」システム

### 4.2.1. 「電話番」の概要

アルファ社は農場、作業場、日本人スタッフの住居、技能実習生の住居など、スタッフの活動範囲が広いとため、連絡を取るには電話が必須である。そのため、日本人スタッフは技能実習生への指示を電話で出すことが多く、アルファ社には、日本人スタッフからの主な指示の受け手になる技能実習生を決めるシステムが存在している。明確な名前がついているわけではないが、日本人スタッフの言葉を引用し、便宜的に「電話番」と呼称する。日本人スタッフ  $\alpha S$  によれば、電話番には最も勤務の長い実習生になることが多く、2019年1月時点までの電話番は  $\alpha A$  であった。前述した通り、インタビューでは主に回答するのは  $\alpha A$  であり、日本人スタッフや実習生も、回答を  $\alpha A$  に求めることが多い傾向にあった。これは、 $\alpha A$  の電話番としての役割に大きく関わる事象であると考えられる。

### 4.2.2. 「電話番」と受け入れ側との関わり

電話番が日本語母語話者と技能実習生をどのように繋いでいるか分析する。そして、技能実習生が日本語の理解に至るために、どのようなインタラクションが行われているか明確にする。

以下のトランスクリプト [利き手] のデータは、 $\alpha A$  と  $\alpha B$  の帰国後、そして  $\alpha E$  の加入後のものである。この時点で、電話番は  $\alpha A$  から  $\alpha C$  に引き継がれている。

[利き手\_08:38]

((新人技能実習生  $\alpha E$  の初仕事の際、 $\alpha E$  の利き手が問題になった。日本人スタッフ  $\alpha S$  が  $\alpha E$  の利き手を尋ねている。電話番  $\alpha C$  が  $\alpha E$  のサポートについている。))

01  $\alpha S$  : + じゃああなたは手はどっちだ? 左じゃないべ.

$\alpha s$  : +  $\alpha E$  に向けて

02  $\alpha S$  : あなた右利きって書いてあったぞ.

03 (0.5)

04  $\alpha S$  : + おい, おいおいおいおいおい. + あなた右じゃねえの, 手.

$\alpha s$  : +  $\alpha E$  を指で呼ぶ + 右手を挙げる

05 (0.8)

06  $\alpha C$  : みぎ.

07  $\alpha S$  : + あな, あなたこう, 箸は? 箸は? + ごはん食べるは?

$\alpha s$  : +  $\alpha E$  を指さし, 箸のジェスチャー + 箸でご飯を食べるジェスチャー

08  $\alpha E$  : + ((问我吃饭了吗))

(ご飯のことを聞いている?)

$\alpha e$  : +  $\alpha C$  に向けて

09  $\alpha C$  : [((嗯))]

(うん)

10  $\alpha S$  : [おお.]

- 11  $\alpha E$  : + ( )  
 $\alpha e$  : +  $\alpha S$ に向けて
- 12  $\alpha S$  : え?
- 13  $\alpha C$  : 食べ:らない.
- 14  $\alpha S$  : や + ちがちが, どちら手手手[手.] + ごはん食べる手.=  
 $\alpha s$  : + 手を左右に振り手を挙げる + 箸でご飯を食べるジェスチャー
- 15  $\alpha C$  : [て?]
- 16  $\alpha C$  : =あ:::.
- 17  $\alpha S$  : うん.
- 18  $\alpha C$  : + ((哪个手吃饭))  
 (ご飯を食べる時どっちの手を使うの)  
 $\alpha c$  : +  $\alpha E$ に向けて
- 19  $\alpha E$  : (( $\alpha S$ に向かって自身の右手を指す))
- 20  $\alpha S$  : + こっちで取る. イチゴこっちで取る, 取る, 取る.  
 $\alpha s$  : +  $\alpha E$ が指している右手を指で指しながら
- 21  $\alpha C$  : hhhh ((你抓反了, 拿反了))  
 (逆に持ち間違えた、逆に持ち間違えた)

$\alpha E$  は新人であり仕事に不慣れなため、日本人スタッフ  $\alpha S$  が指導者となって  $\alpha E$  に仕事を教えている。しかし、 $\alpha E$  は日本語にも不慣れであるため、 $\alpha E$  は  $\alpha S$  の日本語での指導をほとんど理解できていない。それは、01・02行目の  $\alpha E$  に向けられた  $\alpha S$  の発話の後に03行目で0.5秒の沈黙が産出されることや、07行目の  $\alpha S$  の発話を08行目で  $\alpha E$  が正しく理解できていないことなどからも明らかである。

日本人スタッフ  $\alpha S$  は、01行目で「じゃああなたは手はどちらだ? 左じゃないべ。」と  $\alpha E$  の利き手を尋ねている。その後、利き手という概念の説明を行うことが困難であると判断し、07行目で「あな, あなたこう, 箸は? 箸は? ごはん食べるは?」と、箸を持つ手はご飯を食べる手であり、それは利き手であるという説明によって  $\alpha E$  に利き手(仕事を行う手)を理解させようとしている。

ここで重要となるのは  $\alpha C$  の存在である。 $\alpha C$  は日本語にも仕事にも不慣れな  $\alpha E$  のため、日本人スタッフ  $\alpha S$  の日本語を理解し、中国語で  $\alpha E$  に伝える役割を担っている。これは電話番としての役割であると言える。しかし、 $\alpha C$  の日本語能力も際だって高いわけではない。 $\alpha C$  は06行目時点では「みぎ.」とのみ発話しており、 $\alpha S$  に明確な返答を行うことや、 $\alpha E$  に対して  $\alpha S$  の意図を伝えることができていない。また、13行目での発話「食べ:らない.」を  $\alpha S$  の問いに対する返答としているが、14行目で  $\alpha S$  に否定されていることから、13行目の発話は  $\alpha S$  の質問に対する答えとしては不適切であったことが明らかである。これらのことから、13行目時点では  $\alpha C$  も  $\alpha S$  の質問の意図を正しく理解できていない。その後、16行目で  $\alpha C$  は「あ:::。」と強い発話を行い、理解を示している。18行目で  $\alpha C$  は中国語で「哪个手吃饭 (ご飯を食べる時どっちの手を使うの)」と  $\alpha E$  に向かって発話し、19行目で  $\alpha E$  は  $\alpha S$  に向かって自身の右手を指すことで、07行目の  $\alpha S$  の質

問である「あな,あなたこう, 箸は? 箸は? ごはん食べるは?」に答えている。このことから、 $\alpha C$ は16行目で $\alpha S$ の言葉を正しく理解し、18行目で適切な通訳を $\alpha E$ に行ったことがわかる。

加えて、20行目で $\alpha S$ が「こっちで取る. イチゴこっちで取る, 取る, 取る.」と $\alpha E$ の右手を示しながら発話し、21行目で $\alpha C$ が「你抓反了, 拿反了 (逆に持ち間違えた、逆に持ち間違えた)」と中国語で $\alpha E$ に述べた。このことから、21行目時点で、 $\alpha E$ は本来行うべき手とは逆の手で作業を行っており、利き手である右手で作業を行うことが正しいということが $\alpha E$ に伝達されたと見ることができる。

#### 4.3. コミュニケーションにおける問題

コミュニティ構築過程において、技能実習生と日本語母語話者とのコミュニケーションには問題が起こることもある。

以下のトランスクリプト [疲れる] は、アルファ社において、技能実習生のリーダーとしての電話番号であった $\alpha A$ および $\alpha B$ の帰国後のものである。電話番号は $\alpha C$ に移り、新人として $\alpha E$ が加入した直後である。

[疲れる\_10:50]

((日本人スタッフ $\alpha S$ が、「疲れる」の意味が分かるかどうか技能実習生 $\alpha C$ と $\alpha E$ に尋ねている。))

01  $\alpha S$  : + いやっ, あ:の:そんなに::, あ:の:それ, それそれじゃあ疲れるから:, (.)

$\alpha s$  : +  $\alpha E$ に対して

02  $\alpha S$  : これこれ::あ:の:疲れる意味分かる?

03  $\alpha C$  : あ:, つか, れる:, [あ: + わかる,]

$\alpha c$  : + 頷く

04  $\alpha S$  : [ん: ]つかれる. レラレラ((累了累了)).

05  $\alpha C$  : +レラ.

$\alpha c$  : +  $\alpha S$ を見る

06  $\alpha S$  : うん. (.) 疲れる, 疲れる.

07  $\alpha C$  : つかれる.

08 (0.3)

09  $\alpha S$  : 疲れる=

10  $\alpha C$  : =あ::, + あ:分かる, あ:だいじょぶ. いたいいたい=

$\alpha c$  : + 腰に片手を当てる

11  $\alpha S$  : =あ違う疲れる, 疲れる.

12  $\alpha C$  : あ ° 分かる分かる°

13  $\alpha S$  : + ¥わかってねえ¥

$\alpha s$  : + スマホを取り出す

14  $\alpha C$  : つか:, たぶん(.)つか:- + レラ.

$\alpha c$  : +  $\alpha S$ のスマホをのぞき込む





10行目で $\alpha C$ は「あ:;, あ:分かる, あ:だいじょぶ. いたいいたい=」と大きな声で発話し、「疲れる」という日本語への理解を示している。発話と同時に腰に手を当てる動作を行っていることから、「いたいいたい」は「痛い痛い」であり、「疲れる」を「痛い」という言葉に変換して、自らの理解を $\alpha S$ に伝えようとした可能性が高いと考える。これに対して、 $\alpha S$ は11行目で「=あ違う疲れる, 疲れる.」と発話し、 $\alpha C$ の答えは正しくないと判断している。12行目で $\alpha C$ が「あ ° 分かる分かる ° 」と再び理解を示すが、13行目で $\alpha S$ は「¥わかってねえ¥」と発話し、同時にスマートフォンを取り出して翻訳アプリケーションを起動する。その後、 $\alpha S$ はスマートフォンで「疲れる」を翻訳し、24行目でその結果を $\alpha C$ に見せる。25行目で $\alpha C$ は「うんうんうん:」と再び理解を示すが、26行目で $\alpha S$ は $\alpha C$ にオーバーラップする形で「わかんない?」と発話し、 $\alpha C$ が示した理解を受け入れない。27行目で再び $\alpha C$ は「=うんわかる.」と発話するが、28行目で $\alpha S$ は $\alpha E$ に直接指導を行い、 $\alpha C$ の示す理解はここでも受け入れられていない。

30行目で $\alpha C$ は「¥((就那样累))¥=(あのようにしたら疲れるって)」と中国語で $\alpha E$ に伝えている。このことから、30行目の時点では間違いなく、 $\alpha C$ は「疲れる」という日本語の意味を理解していることがわかる。 $\alpha E$ もこの時点で $\alpha C$ の母語での通訳によって、 $\alpha S$ の言葉の意味を理解したと考えられる。しかし、31・33行目で $\alpha S$ は $\alpha E$ に向けてジェスチャーと実演で「疲れる」の理解を促しており、 $\alpha C$ によって $\alpha E$ に $\alpha S$ の言葉が伝えられたということを $\alpha S$ は理解していないように思われる。また、34行目で $\alpha C$ は「いたいいたい.」と発話し、同時に $\alpha E$ に向かって自らの膝を指している。この時点で $\alpha C$ は「疲れる」の意味を理解していることから、10行目の $\alpha C$ の「いたいいたい=」は「痛い痛い」であり、 $\alpha C$ はやはり「痛い」を「疲れる」の代替表現として使用していると見るべきであると考えられる。

日本人スタッフ $\alpha S$ は、技能実習生 $\alpha C$ の示す日本語への理解に対して無頓着であるように見える。これに関して、日本語母語話者 $\alpha S$ はインタビューにおいて、技能実習生 $\alpha C$ に対して行った指示や確認に、理解を示す発話や行動が成されても、実のところは理解されていないことがあると述べて問題視している。実際に、03行目で $\alpha C$ は「あ:;, つか, れる:;, あ: わかる, 」と発話し、「わかる」と同時に頷いているため、「疲れる」という日本語の意味が分かると $\alpha C$ は03行目の時点で示している。しかし、05行目と07行目では $\alpha C$ は明確な理解を示していない。 $\alpha C$ が「疲れる」への理解を強く示すのは、前述の通り10行目である。10行目の時点で $\alpha C$ が「疲れる」の意味を理解したと仮定すれば、03行目の時点では $\alpha C$ は「疲れる」の意味を理解していなかった可能性が高い。このことから、 $\alpha C$ が日本語を理解していない段階でも理解を示す言動を取ってしまったために、 $\alpha S$ は $\alpha C$ の理解を受け入れなかった可能性が考えられる。

トランスクリプト [疲れる] において重要な要素の1つは、このデータが、 $\alpha A$ と $\alpha B$ の帰国後、 $\alpha E$ の加入直後のものであり、 $\alpha C$ を中心に据え、新たに $\alpha E$ を加えたコミュニティの開始期にあたるという点である。 $\alpha A$ から $\alpha C$ に電話番号の交代が行われ、新メンバーを加えた新たなコミュニティ構築の初期段階では、日本語母語話者と新たな電話番号の間にはコミュニケーションに必要な下地ができていない。電話番号制度は、日本語母語話者が電話番号という1人の技能実習生に指示や確認を行えば、電話番号がその情報を他の技能実習

生に周知することができるため、仕事の円滑化・効率化を図ることが可能だと言える。しかし、それは電話番以外の技能実習生と日本語母語話者のコミュニケーションの減少と同義である。日本語母語話者は技能実習生1人1人とのコミュニケーションを取る必要がなくなり、技能実習生全体に目が届きにくくなる。特に、トランスクリプト [ 疲れる ] のように、電話番の交代直後に新人の教育として多くの会話を行わなければならない状況では、日本語母語話者はそれまでの電話番と行っていたコミュニケーションを修正し、関わりの少なかった新たな電話番とコミュニケーションを始めていく必要がある。電話番制度は、日本語母語話者と電話番以外の技能実習生とのコミュニケーションを停滞させている要因であるとも言える。従って、次の電話番の交代や新人の加入があり、コミュニティの再構築が起こる際、再びコミュニケーション不全が起こる可能性が存在する。

## 5. まとめ

アルファ社では、技能実習生のリーダーとしての役割を持った電話番が技能実習生の中心となり、日本語母語話者との遣り取りや通訳を主に行うことで、新しい技能実習生を言語面でも仕事面でも補助し、コミュニケーションの円滑化に貢献している。電話番には技能実習生の代表としての役割が期待されると言うことができ、その一環として、電話番は新人教育や通訳の役割を望まれている。電話番を中心として技能実習生の繋がりが作られ、電話番が日本人スタッフと技能実習生のやりとりの窓口となることで、大きなコミュニティの中核を担っていると言える。そして、電話番の交代と新たな技能実習生の加入というサイクルが繰り返され、新たな電話番を中心としたコミュニティの再構築が始まる。しかし、電話番制度は日本語母語話者と電話番以外の技能実習生とのコミュニケーションを停滞させている要因であるとも言えることができ、電話番の交代や新人の加入があった際にはコミュニケーション不全が起こる可能性が高くなる。

### 資料：トランスクリプト記号一覧

高木他 (2016)	参照
[ ] (角括弧)	2人以上の話者の発話が重なったり密着したりする場所 (音の重なり)。
= (等号)	発話の密着。
(.)	0.2秒以下の短い間。
(n.m)	0.2秒よりも長い間音が途絶えている場合は実際の秒数を括弧内に記す。
. (ピリオド)	語尾の音調が下がっている場合。
, (カンマ)	音が少し上がって弾みがついていて、続きがあることを予測させる場合。
? (疑問符)	語尾の音が上がっている場合。
: (コロンの)	音の引き伸ばし。音の伸びの長さに応じてコロンの数を増やす。
— (下線)	音の強調。
° 言葉°	声が小さい部分。
- (ハイフン)	音の途切れ。
↑ (上向き矢印)	音の調子の急な上昇。
↓ (下向き矢印)	音の調子の急な下降。

>言葉<	目立って早いスピードで発話された部分。
<言葉>	目立って遅いスピードで発話された部分。
¥言葉¥	笑い顔で発話される部分。
h	呼気音。笑いを表す。笑いながら産出される発話は、(h) を挿入する。
( )	聞き取ることが困難な部分。
((言葉))	発話の背景や要約。その他。

Burch (2014) 参照

+ 非言語要素の記述。

筆者オリジナル

日本語以外の言語は (( )) の中に原語を示し、一行下の ( ) 内に日本語訳を示すこととする。

### 参考文献

高木智世・細田由利・森田笑 (2016) 『会話分析の基礎』 ひつじ書房

中川かず子・神谷順子 (2017) 「道内外国人技能実習生の日本語学習環境をめぐる課題：受け入れ推進地域を事例として」『開発論集』 99 北海学園大学開発研究所 pp. 15-32

中川かず子・神谷順子 (2018) 「北海道におけるベトナム人技能実習生の日本語学習意識と学習環境：多文化共生の視点から考察」『開発論集』 102 北海学園大学開発研究所 pp. 79-98

馮偉強 (2013) 「中国人研修生・技能実習生の日本語習得とニッポン」『愛知大学国際問題研究所紀要』 142, pp. 153-181

Burch, R, Alfred. (2014) Pursuing Information: A Conversation Analytic Perspective on Communication Strategies. *Language Learning* 64:3, Language Learning Research Club, University of Michigan. 651-684

(飯田朋子、筑波大学大学院博士前期課程、iida.tomoko.634@gmail.com)